

究研會

號二第一卷第三

行發日十二月四年十一正大

目 次

原典より見たる御本書中の引用經典	泉芳
教行信證延書古寫本の研究	日下無倫
淨土論に於ける奢摩他毘婆舍那に就て	金子大榮
西山上人の觀經疏大意の研究	上杉慧岳
鎮護國家思想の變遷と傳教大師	稻葉圓成
明義進行集追考	橋川
青年クリシユナの信仰	山邊習學
コムトの人道教について	安富成中
涅槃經と日本精神	井上右近
最近佛教關係雜誌論文一覽	
卒業論文題目	
彙報	

近刊豫告

曾我量深論文集
第一卷

救濟と自證

右本年六月初旬發賣

文學博士 谷本富先生

日本文化と佛教

右本年六月初旬發賣

發行元 京都下珠數屋町 丁子屋書店

振替大阪一〇二九〇

立教開宗七百年記念出版

近刊

日下無倫編纂

坂東真本延書

教行信證

○口繪 教行信證延書
古寫本二十枚

○附錄 坂東本略解題
教行信證延書解題

□東京坂東報恩寺所傳の「教行信證」は、夙に親鸞聖人の御草本として名高く、或は稱して坂東御真本ともいふ。世に聖人の御真筆と傳ふる本典に三本ある中、是れ實にその冠たる也。しかれども、本書にはまゝ宋朝風の缺劃文字を使用せるを見、また使用したる送假名、左訓並に返點など古風にして、たゞへ御真本に接する者といへども、恰も「猫に小判」の如く、到底常人の読み得べきにあらざる也。

□然るに編者は十年一日の如く大學に於て専心研鑽、古文書學に没頭する傍ら、坂東御真本（大谷大學所藏影寫本）に就き、その一字一格をも忽緒にせず、原本より直に和字に延譯せる「假名交り文」、是れ實に本書にして親鸞聖人の眞精神をそのまま和文に轉換し得たる現代無二の教行信證和譯なり。

□そもそも「教行信證は漢文體なり」といふ謬を止めよ。外觀的皮相觀察者の眼には、恐らく漢文體と見ゆべしと雖も、本書の味讀體驗者の眼には確に聖人特自の筆格と見ゆべく、漢文體といふよりも寧ろ却て和文といふべき也。否な「教行信證」は正しく鎌倉期を代表すべき堂々たる和文にして、御本書原本を見むよりも却て是を延書（和譯）したる所に價值あり、生命を存する也。

□先人未見の坂東御真本により聖人の眞精神を汲まむとするもの、須らく「延譯の本書」に接せよ。敢て薦む。

京振都替市大下阪珠一〇九二〇屋

丁子屋書店

發行所

會則

第一條 本會ハ佛教研究會ト稱ス

第二條 本會ハ佛教並ニコレニ關聯スル諸般ノ研究ナナスナ目

的トシ

第三條 本會ハ眞宗大谷大學教職員學生及本會ノ主旨ニ賛同ス

ルモノナ以テ組織ス

本會ノ事業左ノ如シ

一、隔月一回例會ヲ開ク

二、隨時講演會ヲ開ク

三、年四回「佛教研究」ヲ刊行ス

第五條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク

一、會長 一名

一、理事 一名

一、評議員 若干名

一、委員 若干名

一、書記 若干名

第六條 本會々員ハ「佛教研究」ノ配布ヲ受ケ例會及講演會ニ出

席スルコトナ得

第七條 本會々員ハ年額金參圓ヲ納ムルモノトス

佛教研究

年四回一七十四月發行
會費年額金參圓

一部賣代金ハ隨宜申シ受ク

廣告欄

一頁 金拾圓、半頁 金五圓

佛教研究第二卷第二號

大正十一年四月十五日印刷

大正十一年四月二十日發行

編輯兼 佛教研究會

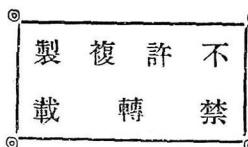
右代表者 藤岡了淳

京都市西洞院通七條下ル

印刷者 村上勘兵衛

京都市室町頭眞宗大谷大學内

印刷所 内外出版株式會社印刷部



發行所

振替 大阪四四九九七番

佛教研究會